

NICUにおけるすくすく日記の有効性を探る
—積極的に交換したすくすく日記1症例を分析して—

1 病棟 4 階東NICU

○ 三木砂織 兵頭紀代美 岡村美穂 高木啓子

I. はじめに

当NICUでは親子関係促進のため、ファミリーケアの一環としてすくすく日記を取り入れてきた。すくすく日記は両親と子(受け持ち看護師が書く)の交換日記の形をとっており、看護師からは児の哺乳量、体重、仕種等を書き、親からは児へのメッセージが記されている。

開設当初の面会時間は、週三回と制限されたものであり、すくすく日記はそれを補うものとして始められた。しかし面会時間の拡大やカンガルーケアの導入等、親と子が直接触れ合うケアが充実して来るにつれて、看護者側も直接的なケアを重要視するようになってきた。この様な流れの中、NICUのファミリーケアにおけるすくすく日記の重要度が低くなってきたのではないかと感じた。

今回、超低出生体重児の母親と積極的にすくすく日記の交換ができた症例を経験した。この症例を分析した結果、ファミリーケアにおいて依然すくすく日記は重要で独自の役割があり、その有効性は他のファミリーケアに劣ることがない事を認識したので、ここに報告する。

II. 症例紹介

1. 家族の背景

家族構成：核家族 父親37歳(医師) 母親33歳(主婦・元看護師) 姉2歳

分娩様式：山口に帰省中、突然陣痛発来。抑制できず当院にて経膈分娩。

母親のキーパーソン：父親 単身赴任中

面会状況：母親はほぼ毎日。父親は帰省時のみで2ヵ月に1回程度の帰省中数日間。

母親の態度：面会中の母親の印象は物静かで落ち着いた人。医師からの説明も冷静に聞き、理解している様子であった。

父親の態度：声かけ、タッチングを積極的に行い、面会中は母親をいたわる態度が見られた。医師からの説明も落ち着いて聞き、理解している様子であった。

2. 児の背景

出生週数：23週6日 出生体重：652g 性別：女

主な診断名：超低出生体重児・早産児・RDS

治療経過(総入院日数：146日間)

出生時：呼吸器装着・保育器収容

84生日：点滴ルート抜去

4生日：経管栄養開始

122生日：コット移床

42生日：感染兆候出現・血圧低下にてステロイド開始

124生日：許可にて直接母乳開始

75生日：眼底検査結果にてレーザー治療

145生日：小児科転棟

77生日：抜管

Ⅲ. 分析方法

低出生体重児の親子関係確立のプロセスをモデル化している橋本¹⁾の「低出生体重児と親における関係性の発達モデル」を使用し、早産で超低出生体重児を出産した母親との出生時より146日間のすくすく日記の内容を分析した。

Ⅳ. 結果

各ステージの分析結果を以下に示す。(表1参照)

s t a g e 0ではみずみずしく赤黒い児を前に、促されて指先で指を突つuk程度であった。母親は終始黙って児を見つめていたが、すくすく日記には「まだお腹の中において欲しかったのでママは本当にびっくりしました。こんなに小さく産んでしまって本当に申し訳ないと涙が出て止まりませんでした。」と早産による児への懺悔と「生きていてね。」と精一杯の気持ちを書いていた。

s t a g e 1では「両手に乗るくらい小さな体に色々な器具がついてて本当に痛々しかった。でもよく動いて、声は出ないけど泣いているMを見て、パパもママもとてもうれしかったよ。」と児が活着ている存在であることに気づいていた。

児の状態が安定せず、生命の危機の状況であったが、s t a g e 0から1は1日、s t a g e 1から2は8日と比較的短期間に発達モデルを前進した。

s t a g e 2では「手を握ってくれたのでママはうれしかったよ。」と児が反応しうる存在であることに気づいていた。この時期母親は毎日面会に来ていたにもかかわらず「いつも私が来ている時に寝ている。ちゃんと動いているのですか。」と面会時間外の様子も尋ねていた。

s t a g e 3では「やっとパパに会えたね。お目々をあけてたけどパパの顔、見えたかな。」と児の反応に意味を読み取っていた。42生日目に状態が悪化した時、「とても心配です。」と落ち込みながらも「大丈夫。この子は大丈夫。」と前向きの記事がされていた。

s t a g e 4での75生日目、眼底検査の結果からレーザー治療を受けることになった。面会時の母親は「不安ですね。でも必要なことだから。」と言葉少なげであったが、すくすく日記には「ママの顔が見れるようにがんばってね。」と治療成功への強い願いが書かれていた。そして「手をさわったらいつもよりギュッとすごい力で握っていたので緊張していたのがよく分かったよ。きっといい方向にいくと思っています。」と書き、児を相互交流しうる存在と認知していた。

s t a g e 4から5にかけて児の状態が落ち着いてきた頃より、児の姉の写真を貼るなど家族についての記載が出てきた。また、受け持ち看護師に「思い出にしたいので、かわいくしたい。どこで、かわいいシールを購入しているのですか。」と尋ね、積極的にすくすく日記を楽しんで書く姿勢が強くなってきた。

s t a g e 5では保育器内での抱っこから直接母乳までとケアの拡大に伴い、すくすく日記でも「ママの顔をじーっと見てたね。ママだって少しは分かったかな?」「初カンガルーOK!!せっかくここまでこれたんだものあせらずゆっくりいこうね。」「肌と肌とのふれ合いはやっぱりいいものですね。」と、児との相互交流の積み重ねについての思いを明記していた。

母親はすくすく日記を毎日書いていた。これに対応するように看護師側も児の表情、状態、仕種等をつぶさに伝えるように記載していた。

V. 考察

すくすく日記から、ある程度親の心理変化を追い知ることが可能である。特に今回の症例では、面会時は殆ど自ら話すことのない親であったが、すくすく日記には、その時々不安が表現され、医師の説明を必死で受け止めようとする姿勢が表れていた。それを情報源として看護師は親の気持ちを受け止め分析し、傾聴、声かけ、医師への説明依頼などのケアをタイムリーに取り入れる事ができた。母親も直接口に出し難い事や自分の意向を医療者側に伝える一方法として、すくすく日記を利用していただけると考えられる。この事から、すくすく日記は両親と医療従事者双方にとって、コミュニケーションの有効な手段の一つであったと言える。

母親にとって一番のキーパーソンである父親は単身赴任で、レーザー治療など、殆ど全て母親一人で受け止めなくてはならない状況であった。また母親は元看護師であり、児の状態はある程度把握している様子であった。急性期にいる児を前にして、母親が「書くことで気持ちをまとめる。」と言っており、書くという行為は、状況の整理、感情の表出に役立っていると考えられる。

母親は父親と頻回に連絡を取っている状況であったが、父親に心配をかけたくない様子もあり、殆ど一人で対処していた。この母親のすくすく日記はほぼ毎日記入され、まさに「日記」というものであった。そのすくすく日記を父親が読むことで、改めて、その時の児の状態、母親の気持ち、感情の動きを認識できたのではないかと思われる。その意味ですくすく日記は両親の感情を共有させる一助となったのではないかと考えられる。

現在面会が毎日可能となり、時間も延長され、本症例でもほぼ毎日、母親は面会に入っていたが、すくすく日記には「いつも面会時には眠っている。」等書いていた。しかも、急性期の児は活動性が乏しく、両親の不安は非常に強い。そこで面会時以外での児の様子をすくすく日記に記載すると「動いているので安心した。」等の返信があった。このことから、たとえ毎日面会に来ていても、母親にとって、それは児の一部分でしかなく、24時間の児の状態を見ることができないのは大きな不安、不満である。そのため面会時間外についての記録ができるすくすく日記は、それを補う一方法である。

NICUに入室し、保育器収容ともなると両親が積極的に育児に参加することは困難であるが、日がたつにつれ、母親として何かをしてやりたいという気持ちは強くなってくると思われる。本症例の母親は最初から積極的にすくすく日記を記入していたが、「思い出にしたい。」とより熱心に参加された。母親にとって、すくすく日記は一連の育児日記であり、困難を乗り越えてきた児の記録を書き綴る事に、親としての役割を感じていたのではないかと思われる。そしてすくすく日記を飾っていくことは、親として何かをしてやりたいという気持ちを表現する手段となったと考えられる。

「母親（父親）は子どもを産んで母親になるのではなく、子どもとの関わりの中で、少しずつ母親となっていく。」²⁾と言われているが、超低出生体重児の急性期は非常に厳しいものであり、当初、両親の育児参加は見守ることのみに終始する。更に「超低出生体重児は、その未熟性から親の養育行動を誘発する行動が乏しいことが多く、そうした中での親子の関係性を育てていく過程は通常の出産に比べて長く困難な道のりとなる。」²⁾と言われている。この状況の中で児への激励をすくすく日記に書くことは児への愛着形成を促し、児に対する認

識を育てる一助になるのではないかと考えられる。また母親は「大丈夫。この子は大丈夫。」と児への励ましを書き続けることによって、自分自身にも励ましを送っているのではないかと考えられる。

以上のことから、すくすく日記はカンガルーケアや抱っこなどの直接的なケアに劣ることはなく、独自の役割があり、ファミリーケアにおける有効性は非常に大きいと再認識することができた。今後もすくすく日記をファミリーケアの一つとして効果的に活用したい。

VI. まとめ

今回、積極的に交換できたすくすく日記の症例を分析して、次の点が明らかになった。

- ① すくすく日記から親の心理過程の変化を捉えることができ、親と医療従事者とのコミュニケーションの一助となった。
- ② すくすく日記を書くという行為が親の感情表出につながった。
- ③ すくすく日記を両親が共有する事は、夫婦間での児の状態把握、感情の共有に役立った。
- ④ すくすく日記で面会時間外の児の様子を知らせることができ、分離不安を軽減した。
- ⑤ 困難を乗り越えてきた児と親の記録となった。
- ⑥ 育児参加できない時に児への励ましを書くことは児への愛着形成を促し、同時に親自身への励ましとなった。

以上のことから、すくすく日記はNICUのファミリーケアの中で独自の役割を持っており、ファミリーケアの中では、依然として重要であることが再認識された。

謝辞

本研究のためすくすく日記を提供して下さったI御家族と、御指導くださった山口大学医学部保健学科の戸部先生に深謝いたします。

引用文献

- 1) 橋本洋子：新生児集中治療室（NICU）における親と子の心のケア．こころの科学，日本評論社，66：27-31，1996．
- 2) 渡辺久子・橋本洋子編：乳幼児精神保健の新しい風．別冊発達 24，ミネルウェア書房，82-85，2001．

参考文献

- 1) 山崎不二子：親子関係形成を助けるケア．小児看護，24(4)，480-485，2001．
- 2) 西海真理：「早産児を出産した母親が児との関係を育むということ」．日本新生児看護学会誌，vol. 8，No. 2，2001．
- 3) 長谷川浩編：系統看護学講座別巻 14 人間関係論．医学書院，46-48，1997．

